

第 4 章 再生資源システムとしての故繊維産業 ---かつての<花形再生資源産業>の盛衰（イントロダクション）---

4 - 1 繊維リサイクルへの着目

4 章以降では荒川区西日暮里地域の故繊維産業について触れる。ここで明らかにしたいのは、何故、再生資源業界が産業としてだけで成立できなくなったかである。その背景に潜むものは何なのかということ考察する。

数多ある再生資源業のなかで故繊維産業に注目したのはなぜか。それは再生資源業でも最もプリミティブな存在であるからだ。繊維リサイクルはその起源を江戸時代にまでさかのぼる事ができる。リサイクルが社会問題、ひいては道徳的通念になる近代以前の創始であるために、純粋な産業であった。戦前の時点でそのシステムはすでに完成されていたのである。しかし、戦後において景気変動を迎えて構築されたシステムは崩壊し、繊維リサイクルは産業という名目だけでは成り立たなくなる。ゆえに、近代のリサイクル運動をうけての倫理的な高揚との共生を必要とした。

現代の多種セクター混合のリサイクルシステムを解明するという点で、その原点である市場だけで構築されたシステムの崩壊の原因を調査することは不可避である。社会変動とともに故繊維産業の歩みを調査することによって、純粋な産業から社会性を持つ産業へとシフトしていく過程の調査こそが、リサイクルシステムの解明に役立つものであると思われる。

この 4 章では故繊維産業の特性を記すとともに、何故、どのように調査を行ってきたかなどの分析フレームを開示していく。

4 - 2 荒川区の故繊維産業の歴史

4 - 2 - 1 現荒川区への移転の経緯

江戸の屑物業界の歴史は浅草に始まるといえる。この頃すでに屑回収が行われ、再生品は商品として流通していた。幕末から明治にかけて、コレラや腸チフスなどの伝染病が発生した。西日本でペストが発生した1957（昭和32）年、ボロ・古綿の輸入が禁止され、翌年には東京でも伝染病対策が行われた。他方で東京の産業の発展は同時に地価の高騰をもたらし、屑物業者の集まる地域は周辺地主たちから存在を疎まれるようになっていた。1903（明治36）年、東京府衛生局や警視庁は屑物取扱場取締規則を定め、1907（明治40）年6月以降は新たな設置は市外に限るとした。これが屑物業者が現在の荒川区へ集まる直

接の契機となった。土地は下谷方面の農民の農地が多く、浅草方面で成功した屑物業者が土地を入手し、それを同業者に貸し付けたり、またのれんわけする形で荒川区全域に広がっていった。

4 - 2 - 2 荒川区における故繊維産業の集積

先述の屑物取扱場取締規則が契機となったことは確かだが、荒川区に集積したということは業者、ひいては業界にとって合理的な判断であったということも付け加えておく。以下の理由が主だったものであると考えられる。

浅草周辺が歓楽地として発展し、不衛生と見なされた屑物業者への取締りが一段と厳しくなった為、営業に支障をきたしたため。

日本工業の発展に伴う取扱原料の増大から、将来的な営業を見越して広い土地を求めたため。

隅田川駅があり、1905(明治 38)年に貨物駅三河島駅ができるなど、交通の便がよかったため。

得意先に最も近かったため。

当時は蔬菜の産地だったために土地が安かった。

東日暮里に消毒所があったため。

再生資源業は営業のしやすさから同一品種が集まる傾向にあるため。

故繊維業者が多く構える東日暮里 1・2 丁目の南端が旧東京市との境界線であることから、業者が官憲の取締りから逃れてきた事が伺える。しかし、境界線ぎりぎりの地帯に居住している事からあまりに遠すぎる郊外への移転は考えていなかったようである。

4 - 3 故繊維産業の特性

故繊維産業と他の再生資源業と比較してどのような特性を持つのか記述していく。

歴史の古さの違い

前述したように故繊維産業は江戸時代に起源を持つ。再生資源業全体を見渡しても、これだけ古い歴史を持つ産業は古紙くらいしかなく、その意味合いでは再生資源業のアーキタイプともいえる。そのため、量を扱う産業であっても、近代における機械化以前に確立したために、人的要因が重要なファクターとなってもいたために、産業構造上の業者間の連環が重要な意味を含んでいた。

商品の耐久

故繊維は天災・戦争などの物が不足している時代の産業である。その頃は、服の洗い直しや仕立て直しは繰り返し行われ、いかに長持ちさせるかが重要であった。また、既製の流通以前は家庭縫製が主流であったために古着の回収・再利用は産業として十分

に成り立っていた。

多岐に渡る用途

故繊維の用途は多種多様にわたる。製紙原料、ウェス、反毛、輸出用中古衣料などが主である。そのため、その収益の決定条件は常に需要者が握っており、選別作業が重要な要素となっている。クオリティなどの諸条件が業者の生存条件になりうるという点で古紙などとは相違がある。また、需要に生死を掌握されているという点において、常に一定量のストックが必要であり、そのための土地を確保することなども重要である。

素材の多様性

衣料用の繊維品は多様な素材を用いている。また、副資材や染料の問題もあってか分別は困難を極める。そのため、分別の労力に見合った採算がとれないというのが現状である。

商品としての意味合い

繊維製品は他のリサイクル製品に比べて、ファッションの意味合いを持つものが少なくない。前者は既製品ブームに影響を大幅に受けたために、人々にかえりみられなくなりつつある。

環境付加の問題

故繊維産業が仮に成り立たなくなったとしても、環境に与える付加は少ない。森林伐採に直結する古紙のような場合とちがい、ヴァ - ジン原料を採択する事は対して環境に影響を与えないからだ。また、産業廃棄物も比較的少ない。

マテリアル自体の変化

故繊維はそのリサイクル過程においてマテリアルを変化させる。同じものとして再生はできないのである。

ルートの多段階性

故繊維産業はその起源において、大規模な業者が業界を牽引していたという類のものではなく、零細な業者の集合であった。しかも製造過程における多段階の業者で構築されている。どの業者も経営資源に乏しく、環境リサイクル問題に取り組むだけの余裕がないというのが実態だ。また、多段階であるゆえに逆商流ルートが確立しておらず、回収責任の所在が明確とされていない。

独自ではない回収機構への依存性

故繊維産業は独自の回収機構を持たない。常に外部にある回収機構に依存する形で回収を行ってきた。そのため、その変遷は多く、それが業界に大きな影響を与えてきた。

4 - 4 荒川故繊維業調査の分析フレーム

4 - 4 - 1 調査のスタンス

前述したように荒川区東日暮里地区は、故繊維産業の隆盛にともなって非常に特徴的な街に発展していったといえよう。街の属性を語るうえで故繊維産業の存在は不可欠なものとなっている。それは再生資源システムにおいても決して例外ではなく、戦後の故繊維産業業界の変動の影響は計り知れない。

その故繊維業にたずさわる人間は時代によってしばしば適応を強いられてきた。それは事業転換であったり、業態転換であったりと多種多様なケースに枝分かれしている。第2部4章～6章では、故繊維業者の適応過程の背景を解明することによって、それらがリサイクルシステムにどのような影響を与えていったのかということが判明するというスタンスで調査を行った。

4 - 4 - 2 第5章の分析フレーム

第5章では戦後の故繊維産業を成り立たせていた条件に着目し、それらの変遷が故繊維産業の産業連関を違う形に変えていったという論立てで分析を行った。各節はそれぞれ、産業の成立条件に大きな影響を及ぼしたと思われる社会変動を区切りとした。プロトタイプとなる戦前の産業構造については第1部2章2節ですでに触れているので記述の重複は避けた。故繊維産業が大きな転換を迎えたのは高度経済成長期をひとつのピークとした第2次世界大戦後からであるので、戦後にフォーカスを絞って分析を進める。

第2次世界大戦直後のベーシックな産業連関は以下のように表される。(ボロの物流モデル)

回収機構 問屋 撰分業者・加工業者 問屋 需要(メーカー・消費者など)

現代の産業連関の最たる特徴に問屋周辺の業者の連関の稀薄化が挙げられる。戦前～昭和中期の粘着質な関係性と比較しても明らかな変化が見うけられる。このような産業連関の変化を規定するものは何であるのかといった問いを考えるにあたって、まず産業の成立条件としての回収機構(入り口)と需要(出口)の変化に着目してみた。また、地域集中の意味、それによって生まれる効果、組合の機能といった観点を付け加えることによってより正確な解釈を求めた。

4 - 4 - 3 第6章の分析フレーム

第5章では産業という大きな流れから「故繊維業者」の連関構造を分析したのに対して、第6章ではヒアリング記録をもとにして個別のケースを分析していく。問屋・選別・加工などの「ボロ」を取り扱う業者の高度成長における適応過程をつぶさに分析し、各々がど

のような思惑を抱いて対応していったのかを解明する。また、「くず」を取り扱う裁落業に連なる業者とその独自の発展である日暮里繊維街もまた、この地域の故繊維業を取り扱う点で不可欠であり、「ボロ」の業者とは異なるケースとして分析を進める。